香もありげにきこゆ、處女巻に、まつりのころは云々、前齋院はつれ〴〵となながめたまふ、おまへなるかつらの下風なづかしきにつけても、わかき人々は、思出ることどもあるを云々、これも楓と聞たり、然るに此記に乎加都良にあてたる楓字をも書たるは、たゞ加都良に用ひたる字を借れるのみなり、古は言だに同じければ、其文字には拘らぬは常なり、楓は香木と云べき物に非ず、漢籍には香楓ともあれど、御國の乎加都良にには、香なきこと、右に云るが如し、又古書に楓字を書るは、楓香木とあるは桂（カツラ）と二にも見るべけれど、楓字かける處も香木とある處も、事のさま全同物と聞えて、二には非ず、又書紀に杜木と書るは、古杜字をあてたる由は、心得がたけれど、字鏡に杜毛利又佐加木とあるを思ふに、かの今云多夫の木は、殊にみづみづしく、いとよく榮ゆる木なれば、上代に是をも榮樹（サカキ）と用ひ、又神社などにも殊に多くありけむ故に、やがて毛利にも此字を用ひしなるべし、万葉十巻に、志良加志にも、白杜樹とかける加志を、古は榮樹と用ひたり、此彼を合せて思ふに、杜木と書る方も女加都良の方なりけり、

〔新撰字鏡　木〕橡　詳兩反、木實、止知、

〔倭名類聚抄十七菓〕杼　爾雅集注云栩音羽、又香羽反　一名杼音栩、又當旅反、與苧同、和名止知、莊子狙公賦杼是、

〔類聚名義抄三木〕橡　音象ツルハミ　杼音栩、又苧、トチ、又竽、竽、　杤トチ　十千義歟　栩羽雨二音、杼栩、トチ、カシノキ、

〔撮壤集中木〕橡（トチ）　杼（トチ）同

〔饅頭屋本節用集土草木〕杼（トチ）

〔重修本草綱目啓蒙二十五果〕天師栗　トチノミ　弘法大師クハズノクリ　阿州　木一名七葉樹　鎮江府志　娑羅樹同上

トチノキハ深山ニ多シ、葉形大ニシテ長ク、商州（ホノキ）厚朴葉ノ如ニシテ、細歯アル者七葉並ビテ槭（モミヂ）樹ノ葉ノ如ナルヲ一葉トス、多ハ葉ナシ、春新葉ヲ生ジ、四月枝梢ニ花ヲ開キ穂ヲナス、長サ五六寸、花ハ五瓣、大サ四五分、淡紅色、實ハ山茶（ツバキ）ノ實ノ如シ、秋ニ至テ熟ス、外皮厚サ二分許、茶褐色、熟スレバ自ラ三ツニ裂テ落ツ、内ニ子一顆アリ、圓扁ニシテ中グリノ如シ、色モ栗殻ノ如シ、山民殻ヲ去リ米粉ニ雜ヘ搗テ餅トス、トチモチト云、木ハ机箱等ニ造（ツクル）ニ用ユ、良材ナリ、間道（シマヂ）アリテ美ハシ、俗ニ一寸十チヾミヲ上品トス、薪トナシテ火勢強シト云、